

# ドイツ民主主義教育における生徒参加の類型化に関する試案

柳 澤 良 明

## 1. 本研究の目的と課題

本研究の目的は、ドイツの民主主義教育 (Demokratiepädagogik, Demokratierziehung, Demokratiebildung) において見られる生徒参加にはどのようなタイプが見られるか、その類型化に関する試案を作成することである。なお、ドイツでは初等教育においても「生徒」(Schüler) が用いられているため、本研究においてもこれに従う。

ドイツの民主主義教育は2000年代初頭から取り組みが始まり、実践に取り組む学校の数は次第に拡大している。とりわけ近年では、2018年に常設各州文部大臣会議 (KMK) から決議「学校における歴史的・政治的教育の目的、対象、実践としての民主主義」(Demokratie als Ziel, Gegenstand und Praxis historisch-politischer Bildung und Erziehung in der Schule) (以下、KMK決議 (2018) とする) が公表されたことで、各州の取り組みはより一層の拡大を見せている。

こうした民主主義教育には次のような3つの特徴が見られる。第一に、実に多様な実践形態が見られるという点である。民主主義教育は特定の教科で実施されている訳ではなく、各校においてきわめて自由に、またきわめて多様なテーマで実施されている。見方によれば、100校あれば100通りの民主主義教育の実践が存在するといえるほどである。

第二に、第一の点と関連して、学校全体の取り組みとして実践されているという点である。これについては、KMK決議 (2018) において学校が取り組むべき課題について論じられる中で、「民主主義を学び経験することは横断的課題 (Querschnittsaufgabe) であることを意味している」(KMK 2018: 8) と指摘されていることに端的に示されている。民主主義教育は、ドイツで長年取り組まれてきた政治教育 (Politische Bildung) とは理念や実践形態が異なり、単なる社会科での学習に止まらず、あらゆる教科での学習と関係している。また教科での学習だけでなく、日本でいう特別活動に当てはまる諸活動にも深く関係している。

第三に、第二の点と関連して、どのような民主主義教育もいわゆる生徒参加 (Schülerbeteiligung, Schülermitwirkung) によって成り立っているという点である。これは、民主主義教育の理念として「民主主義的行動能力の獲得」(Erwerb Demokratischer Handlungskompetenz) (de Haan/Edelstein/Eikel (Hrsg.) 2007: 6) が重視されていることにもとづく特徴である。授業やプロジェクト活動で学習した事柄を日々の学校生活の中で実際に実践していくことをとおして民主主義にもとづく行動能力が獲

得されることが求められているためである。

しかし、一見すると100校において100通り存在するように見える各校における民主主義教育の実践を詳細に分析していくと、基本的な理念や取り組みには類似性が存在すること、一見多様に見える原因はいくつかの異なる活動の組み合わせで成り立っているためであること、などが見えてくる。そのため、各校の実践を詳細に分析し、その中から基本的な理念や取り組みを抽出することで、生徒参加を類型化することが可能であると考えられる。

そこで本研究の課題として次の3点を挙げる。第一に民主主義教育に取り組む学校で見られる生徒参加の実践事例を取り上げ、生徒参加の特質を分析すること、第二にこれらの実践事例をアイケル (Eikel, Angelika) の論稿 (Eikel 2016) を手がかりに類型化し、生徒参加タイプの試案を作成すること、第三に生徒参加の類型化に関する今後の研究課題について論じることである。

日本においては、「学校教育法施行規則」の改正により2000 (平成12) 年に学校評議員制度が導入されるとともに、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により2004 (平成16) 年に学校運営協議会制度が導入され、さらに「学校教育法施行規則」の改正により2007 (平成19) 年に学校関係者評価制度が導入された。この20年余りの間に、これらの法改正により、保護者や地域住民による学校参加が急速に拡大し定着してきた。加えて「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により2017 (平成29) 年に学校運営協議会設置の努力義務化が施行されたことで、学校運営協議会の設置が一気に増加しており、保護者や地域住民の学校参加はさらに進展することが予想される。

しかしながら、こうした法制化による学校参加には児童・生徒は含まれておらず、欧米で広く見られる生徒参加に関しては、日本では少数の学校において例外的に実践されるに止まっている。しかしながら、シティズンシップ教育やドイツのような民主主義教育の意義や成果を考えると、生徒参加の実現は学校経営のみでなく学校教育における重要課題であると考えられる。本稿で取り上げる生徒参加の類型化に関する研究は今後、日本において生徒参加の理念や実践に関する研究を進めて行く上での基礎研究として位置づけることができる。

## 2. 実践事例校の選択方法

ドイツでは2000年代に入り、優れた取り組みを進める学校を表彰する賞が次々に創設されている。そのうちのひとつとして「ドイツ学校賞」(Der Deutsche Schulpreis)がある。同賞は、「至る所に優れた学校がある。それらの学校は創造性を発揮し、達成への意欲を喚起し、生きる喜びと生きる勇気を高め、公平さと責任感を促進する。彼らのコンセプトやアイデアが他の学校でも効果を発揮するために、彼らの取り組みは社会から注目され認識される必要がある。そのため、ロベルト・ボッシュ財団とハイデホーフ財団は2006年にドイツ学校賞というコンテストを創設した。このコンテストにはメディア分野の協力団体としてシュテルンとARDが協賛する」(Beutel/Höhmann/Pant/Schratz (Hrsg.) 2016 : 189) とされるように、同賞は2つの財団と2つのメディアによって創設された。

また同賞の評価の観点には次の6点が挙げられている (Das Deutsche Schulportal 2020b)。第一に、「優れた業績を達成している学校」を求める「業績」(Leistung)である。第二に、生徒の持つ多様な背景等に対して「効率的に対応する方法や手段を見出す学校」を求める「多様性への対応」(Umgang mit Vielfalt)である。第三に、「生徒が自らの学習を自ら管理することに配慮する学校」を求める「授業の質」(Unterrichtsqualität)である。第四に、「お互いに敬意に満ちた関係、力によらない葛藤の解決、物事への念入りな対応を前提とするだけでなく、互いに信頼し合いながら日々実現している学校」を求める「責任」(Verantwortung)である。第五に、「良い風土と刺激に満ちた学校生活がある

学校」を求める「学校風土、学校生活、学校外の協力者」(Schulklima, Schulleben und außerschulische Partner)である。第六に、「教員間の協力、指導、民主的運営などで新しい成果志向の形態を実現し、教員の動機づけや専門性を計画的に支援する学校」を求める「学習する組織としての学校」(Schule als lernende Institution)である。

これら6つの観点は直接的にあるいは間接的に民主主義教育との関連性を有している。とくに直接的な関連性を持っているのは第四の「責任」の観点である。「責任」の観点をさらに具体的にみると、「民主主義学習」(Demokratielernen)、「参加」(Partizipation)、「責任遂行」(Verantwortungsübernahme)という3つの下位観点が設けられている。これらの各下位観点については、たとえば、「生徒たちが自らを民主的な共同体の重要な構成員と見なすようになるために、生徒たちをどのようにサポートしているか」(民主主義学習)、「生徒たちは学校でどのように協働権や協働の機会を知り、活用することを学んでいるか」(参加)、「学校経営担当者と教員は生徒が自らの生活に責任を持つために、(年齢に応じて)必要な能力を生徒たちにどのように伝えているか」(責任遂行)といった問いが設けられており、各校にとってこれらの観点は自校の実践を振り返るチェックリストの役割を果たしている。同賞は2006年度から始まり、2020年度の受賞校まで計85校が受賞している。

「ドイツ学校賞」と関連して2015年に「ドイツ学校アカデミー」(Die Deutsche Schulakademie)も設立された(Rösch/Wolf 2016:187)。これについては、「ドイツ学校アカデミーは、ロベルト・ボッシュ財団とハイデホーフ財団によって、過去10年間にドイツ学校賞を受賞したすべての優れたアイデアとアプローチを広めるという野心的な目標を掲げて2015年に設立された。ドイツのすべての学校は、受賞者のコンセプトと成功から恩恵を受けるはずである。ドイツ学校アカデミーは、このプログラムにおいて、教育制度と学校制度のさらなる発展のために、『異質性に生産的に対応する』、『新しい学習構造を設計する』、『学校を経営する』、『民主的に行動することを学ぶ』という4つの最も重要な主題分野を取り上げている」(Beutel/Hömann/Pant/Schratz (Hrsg.) 2016:189)とされ、「ドイツ学校賞」受賞校の取り組みをこれらの観点から取り上げ、その実践の基本的な考え方や具体的な実践内容をドイツ全土の学校に広める役割を担っている。

そこで本稿では、この「ドイツ学校アカデミー」が運営する「ドイツ学校ポータル」(Das Deutsche Schulportal)の中で民主主義教育に関連するキーワードでヒットした学校のうちから、活動の幅が広い中等教育の学校における生徒参加に焦点を当て、さらにその中でも活動内容が異なる3校を選び出し分析することにする。なお、各校の実践に関する情報は、おもに「ドイツ学校ポータル」に掲載されている情報による。

### 3. 生徒参加の実践事例校分析

#### (1) 事例Ⅰ：ノイルビーン学校(Schule Neuruppin) (ブランデンブルク州)

##### ①実践事例校の概要

はじめに実践事例校として取り上げるのは、「ドイツ学校ポータル」の「重点テーマ」(Schwerpunkte)で「責任と参加」(Verantwortung und Partizipation)に分類され、「キーワード」(Schlagwörter)では「民主主義的な行動」(Demokratisch Handeln)でヒットした、2012年の「ドイツ学校賞」受賞校ノイルビーン学校である。以下、同校の実践に関する情報は「ドイツ学校ポータル」に掲載された2019年3月12日付の記事「責任を分ける－学校文化を支える」(Verantwortung teilen - Schulkultur fördern) (Das Deutsche Schulportal 2019)による。まず同校の基本データは以下の通りである。

- ・学校形態：基礎学校（1-4学年）、中等学校（5-10学年）、ギムナジウム（11-13学年）
- ・生徒数：1080名
- ・教員数：85名
- ・他の職員数（Weiteres Personal）：約20名

同校は、5-13学年対象の中等教育段階Ⅰ・Ⅱだけでなく、1-4学年生対象の初等教育段階も設置されている宗派別私立学校である。

### ②生徒参加の特質Ⅰ：「生徒が学校を担う」日から学ぶ責任遂行

同校の生徒参加は「生徒が学校を担う」日（“Schüler-machen-Schule”-Tag）にみられる。これは次のような取り組みである。「毎年、クリスマスの前日、ノイルピーン学校の教員は全員で教員研修所を訪問する。管理人の部屋も秘書の部屋も不在になり、どこにも大人がいなくなる。大人たちの代わりに、11年生の生徒たちは1日がすべて順調に進むように活動する。彼らは校内の3つの施設のすべてを担当し、第1学年から10学年までの授業を行い、学校のその他のすべての日常の活動も担う。彼らの目標は、時間割どおりに、学校内で1時間目から6時間目まで進んで行く授業を分担して実施することである。大きいか小さいかに関係なく、発生する問題すべてをこの日は11年生が責任を持って解決しなければならない」（Das Deutsche Schulportal 2019）とされるように、「生徒が学校を担う」日は、11学年の生徒（日本の高等学校2年生に相当）に1日分の学校の取り組みすべてが任されるという、きわめて思い切った取り組みである。この取り組みをとおして、生徒たちは責任を遂行することの難しさを経験する。

この取り組みには相応の準備が求められる。「『生徒が学校を担う』日には、生徒たちがまず初めに、どの分野に自分の強みがあり、どのような任務を担いたいのかを明らかにすることから始まる長い準備のプロセスがある。生徒たちは共同で、授業、休み時間の監督、食事の時間の監督、短い時間での交代に関する運営計画を立てる。生徒たちは自主的に授業を準備し、各教科の教員と連絡を取る。授業は該当する学習指導要領の中の主要テーマに焦点を当てて行われるが、生徒には、自分の考えにもとづいて年間計画にはないテーマを扱う機会も与えられている。自信を持って任務を遂行するために、すべての11年生が事前に各教科教員、学校管理人、秘書、学校経営担当者で打合せを行う」（Das Deutsche Schulportal 2019）とされるように、実施日に至るまでには長期間にわたる入念な準備があり、この長期間にわたるプロセスの中で生徒たちは教員と綿密なコミュニケーションをとる。

「生徒が学校を担う」日の後には新たな取り組みが待っている。「クリスマス休暇の後に、学校で呼ばれる『先生役の生徒』は授業をした学級や担当教員から授業に関するフィードバックを受け取る。彼らの多くは後に時折、授業代理者として『彼らの』学級に戻ることがある。さらに生徒たちはノイルピーン学校で、定期的に1時間あるいは数時間、自己責任であるいは教員とのチームで授業をする機会を持つ」（Das Deutsche Schulportal 2019）とされるように、「生徒が学校を担う」日の後にも担当した下級生と関わる機会が用意されている。

### ③生徒参加の特質Ⅱ：生徒たちの多面的な成長

「生徒が学校を担う」日をとおして生徒たちは様々な力を身につける。「参加する生徒たちは授業者として協同的な学習に対して責任を負う。学校が経験したのは、こうした取り組みは生徒たちが学校システム全体に対してより強い責任を感じ、『彼らの』学校という意識をより強く持つことになるという結果をもたらす、ということであった。プロジェクトの間、自分の創造性と自分自身を

よりよく知る機会を得る余地が生徒たちに与えられる。生徒たちは各人が、自分のどのような強みを生かしてプロジェクトの日の成功に貢献することができるかについて共同で検討する。これにより、チームで取り組む力が強化される」(Das Deutsche Schulportal 2019)とされるように、この取り組みをとおして生徒たちは責任を持って成し遂げる力だけでなく、様々な力を高めていく。

さらに次のような効果もある。「『生徒が学校を担う』日によって、しかし後には『彼らの』学級での代理授業によって、生徒たちは貴重な経験を得て、教授方法に関する能力を高める。何人かの卒業生は、まさにこうした経験が教職への好奇心を刺激したと報告している。生徒たちは、教員の仕事だけでなく、秘書や学校管理人の仕事への異なる見方を獲得し、こうした職務分野がいかに複雑であるかを知る」(Das Deutsche Schulportal 2019)とされるように、キャリア教育の役割も果たしており、「『生徒が学校を担う』日は下の学年の生徒たちにも幅広い経験を提供する。お互いの受容と認識が学校共同体への帰属意識を高め、学校風土にプラスの影響を与える」(Das Deutsche Schulportal 2019)とされるように、学校風土づくりにも役立つ。さらに、「参加している生徒たちは皆、フィードバックを得る。プロジェクトの日は数年前からこうした方法でノイルピン学校にはフィードバックの文化があるということに貢献しており、この文化は生徒全員にとっては自明のこととなっている」(Das Deutsche Schulportal 2019)とされるように、生徒たちは自らの取り組みを客観的に振り返るフィードバックの機会を得ることで確実に力を高めている。

#### ④生徒参加の特質Ⅲ：教員と生徒との対話

「生徒が学校を担う」日には教員の力も欠かせない。「学校の日常生活に明確なリズムがあり、誰もが条件を知っていれば、このコンセプトは簡単に適用できる。責任を持ってすべての疑問を明確にしてから考えを持って教員と対話する生徒のグループがあれば、導入は簡単である」(Das Deutsche Schulportal 2019)とされるように、何よりも教員と生徒との対話が重要であることが指摘されている。

さらに、「学校経営担当者がプロジェクトの背後におり、責任を持つことが重要である。これにより、教員は生徒たちへの支援に集中することができる。しかし、このコンセプトは、教員が生徒を信頼している場合にのみ機能する。ノイルピン学校の生徒たちはこうした信頼を得ていることを知っており、それに応じて責任をもって行動することが示されている。同様に生徒は、学校の他の場面でも責任を担い、与えられた裁量を活かす方法を知っていると示すことにも積極的であることが分かっている」(Das Deutsche Schulportal 2019)とされるように、教員と生徒との信頼関係の重要性も指摘されている。

その上で、「基本的な枠組み条件は、11学年の生徒たちが事前に各教科の担当教員と協力し、学級の特質について話し合い、どのような内容のテーマを扱いたいのか、生徒はどのようなことに重点を置きたいかについて議論することである」(Das Deutsche Schulportal 2019)とされるように、生徒たちの自主性を重んじることが可能となる。

その結果、「教員は『生徒が学校を担う』日に教員研修から戻った際に、この日、学校の近くで世界大戦中の爆弾が処理されなければならなかったことを知り驚いた。処理準備のために警官は事務室で校長に尋ねた。校長役の生徒は、自分は校長代理であると自己紹介した。警官は初め驚いていた。しかし、警官は校長役の生徒に爆弾処理の状況を説明した。校長役の生徒は教員役の生徒と話し合い、生徒は安全上の理由から休み時間は室内で過ごすべきであると決定した。本当の校長は後になって初めてこうした状況を知った。警官は校長役の生徒の慎重な対応を賞賛した」(Das Deutsche Schulportal 2019)とされるように、生徒たちは突然の状況にも対応できる力をつけている。

## (2) 事例Ⅱ：マルティン学校(Martinschule) (メクレンブルク・フォアポンメルン州)

### ①実践事例校の概要

次に実践事例校として取り上げるのは、「ドイツ学校ポータル」の「重点テーマ」において「インクルージョン」(Inklusion) および「個別化学習」(Individualisiertes Lernen) でヒットした、2018年の「ドイツ学校賞」受賞校マルティン学校である。「インクルーシブ教育は民主主義的な社会での生活の準備という点で民主主義の教育である」(DeGeDe 2016) とされるように、「インクルージョン」は民主主義教育の重要な概念の一つであるとされている。以下、同校の実践に関する情報は「ドイツ学校ポータル」に掲載された2020年1月15日付の記事「日々の授業の中でつねに自己決定による学習プロセに取り組む」(Selbstbestimmte Lernprozesse im Alltag begleiten) (Das Deutsche Schulportal 2020a) による。

- ・学校形態：統合型総合制学校(基礎学校、ホルト、ギムナジウム上級段階を併設)
- ・生徒数：575名
- ・教員数：75名
- ・社会福祉教員数：75名

「グレイフスヴァルトにあるプロテスタント系の学校センターであるマルティン学校は特別支援学校から出発し、今日では基礎学校と、ギムナジウム上級段階を併設した統合型総合制学校から構成されている。どちらの学校でも障害のある子どもとない子どもと一緒に学ぶ」(Das Deutsche Schulportal 2020a) とされるように、同校は基礎学校(1-4学年)とギムナジウム上級段階(11-12学年)を持つ総合制学校(5-10学年)であり、宗派別私立学校である。

### ②生徒参加の特質Ⅰ：生徒の自己決定にもとづく学習

同校で生徒参加の特質として挙げられるのは自己決定による「個別化学習」である。「授業は個別化された形態で行われる。同時に、生徒は自分自身の目標を設定し、それらを達成するために努力することが奨励される」(Das Deutsche Schulportal 2020a) とされ、「自主学習は基礎学校から始まる。ここで(後に統合型総合制学校でも)重要なのは、1年生から行われる目標合意(Zielvereinbarung)である。学習内容を決めるのは教員ではなく、教員との対話によって生徒が優先的に決める。何に興味があり、次に何を学びたいか、どの程度の難易度が適切か、誰と一緒に学びたいかを教員との対話によって決める。保護者や教員と一緒に重点目標について合意を形成する。たとえば、かけ算表づくり、読む本、特定のテーマについての発表準備、等についてである。生徒には1年生の時から、自由活動時間(Freiarbeitszeit)にどのテーマや課題に取り組むかを自由に選ぶ機会とその目標に到達する機会がある。生徒は、自分がどの程度達成しているかを確認するために、ドイツ語、数学、英語などの教科で学んだことを自ら定期的にチェックする」(Das Deutsche Schulportal 2020a) とされるように、1年生から学習内容や学習方法に関する教員との相談にもとづく自己決定の機会が与えられている。

さらに、「3年生以上になると学習計画(Lernplaner)が追加のツールとして加わる。生徒はこのツールを使って自らの学習内容を組み立て、1週間全体を視野に入れることを学ぶ。英語にはさらに練習問題時間割(Übungszeitplaner)もある。同様に3年生以上は、2つ専門コース(工作と演劇)が入った公開学習日(offener Lerntag)がある。公開学習日は、週に1回、午前8時から午後12時30分まで行われる。子どもたちは、2つの専門コースのいずれかを選択するか、その時間を使って自らの学習目標に取り組むかを決定する」(Das Deutsche Schulportal 2020a) とされるように、

生徒たちは次第に選択肢が増えていく中でも自己決定できるようになる。

つづいて中等教育段階になると、「基礎学校で週に一度、実施されている『公開学習日』は、統合型総合制学校では数学、ドイツ、英語といった教科で週を通して実施される。各生徒は自由学習時間中に、自らの進み具合に応じて、教員から自分の課題と個人的な支援を受ける。学習計画にもとづく活動も継続する。統合型総合制学校の生徒は、1年のうちに何度か、次の数か月間に取り組む学習内容を確認する。生徒は、自分はすでに何ができるのか、自分の次の目標は何かを知っている。教員は生徒の計画づくりを支援する。5～12週毎に、教員と生徒と保護者の間で新しい目標についての話し合いが行われる。特定の11名の生徒グループで行われる朝の会で、その日に取り組むすべての目標が挙げられる。1日の終わりに、帰りの会で、各人が取り組んだことについて一緒に評価し合う」(Das Deutsche Schulportal 2020a)とされるように、各人が立てる学習計画のスパンはさらに長くなる。また学習活動は個別化されてはいるが、進行状況に関しては教員との綿密なコミュニケーションの機会が設けられており、振り返り際には生徒同士のコミュニケーションの機会も設けられている。

### ③生徒参加の特質Ⅱ：自己決定から得る学習意欲

同校では、「マルティン学校の目標は、個々の生徒に個別支援と適切な挑戦の機会を与えることである。学校は、民主主義を学び生きる共同体として理解され、つねに発展していく学習機関として理解されている」(Das Deutsche Schulportal 2020a)とされ、「多様性を受容することと並び、各自の高い動機づけへの支援を行うこと、日々の学校生活での具体的な学習目標設定能力を育成することがこの学校の重要な目標である」(Das Deutsche Schulportal 2020a)とされるように、生徒一人ひとりの多様な自己決定が重視されている。また、「各生徒が各自の能力に応じて自分のペースで学べるようにすることが成し遂げられるべきである。また生徒は、自らの学習を自己決定によって自分のものとすることを学び、努力する必要があるがそれだけの価値がある何か意味のあるものとして感じることを学ぶべきである。経験が示しているのは、学びたいことを自分自身で決めることが許されている子どもは意欲を持って学ぶということである。長い時間をかけてあるテーマに取り組む可能性は、生徒が実際の活動の流れに入ることに導く。経験によると、マルティン学校の教員は、学習の伴走者として役割を自覚している。多くの教員が以前の立場のときよりも仕事をしていると感じており、同時に日々の仕事に満足している。子どもや若者が自分の学習レベルを知っているので、教員は責任や仕事から解放されている」(Das Deutsche Schulportal 2020a)とされるように、生徒の学習意欲は自己決定をベースとしており、教員の役割は生徒の自己決定を適切に支援することに向けられている。

### ④生徒参加の特質Ⅲ：多様性を受け入れる教員

こうした背景には同校の歴史が影響している。「以前は知的障害者のための学校であったことから、マルティン学校でのインクルーシブ授業にとって不可欠なノウハウはすでに用意されていた。教員が活用できる知識や新しいことを学ぶ意欲、成功の基本的な前提条件であった。生徒のために目標を多様化させ、皆が同じようには育成されないというコンセンサスも重要であった」(Das Deutsche Schulportal 2020a)とされ、同校には多様性を受け入れる風土があった。ただし、「こうしたコンセプトが成功するためには、早い時期に、教員の支援によって生徒が学習に対して自分で責任を持ち、自己有用感を感じる機会が与えられるべきである。そのためには、難易度、テーマ、パートナー、具体的な目標を選択するための計画づくり(Planungsrituale)が重要である。作業課題や計画は数時間あるいは最大でも1日で管理できなければならない。いずれにしても目標を達成す

ることは可能である。その上で、生徒が結果をプレゼンテーションできる場での評価のフィードバックを得ることが不可欠である。マルティン学校では毎日、学級での帰りの会あるいは特定のグループでの帰りの会で終わる」(Das Deutsche Schulportal 2020a)とされるように、多様性を受け入れる風土が生徒たちに浸透することが必要であり、そのための取り組みも用意されている。

そのため、教員の役割は大きい。「こうした取り組みにおいて教員は、学習支援に向けた新たな役割を実行するために、学校管理職や経験豊かな同僚教員からの様々な支援を必要とする。教員は特別支援アシスタントや他の授業アシスタントとともに生徒集団に対してチームで責任を負う」(Das Deutsche Schulportal 2020a)とされ、「教員にとってのもう一つの挑戦は授業の中で様々なタイプの課題を提供しなければならないことである。教員は各生徒の学習状況に個別に適応できなければならない。こうした職務を遂行するために、マルティン学校はモンテッソーリ教育を採用している。各教材が高いレベルの要求を含んだ明確な課題設定と自己制御の機会を持っているためである」(Das Deutsche Schulportal 2020a)とされるように、教員には個人としての力もチームとしての力も求められている。

さらに、「保護者を参加させることも重要であることが証明されている。保護者は自分の子どもが何をしているか知る必要がある。透明性とコミュニケーションは保護者が学校の取り組みを納得するために重要な役割を果たしている。マルティン学校では、定時の保護者面談、保護者向け通信、毎週の(あるいは多くの生徒にとっては)毎日の連絡帳などが有効な手段であることが証明されている」(Das Deutsche Schulportal 2020a)とされるように、保護者との協力関係も重視されている。

### (3) 事例Ⅲ：マティアス・クラウディウス学校(Matthias-Claudius-Schule)

(ノルトライン・ヴェストファーレン州)

#### ①実践事例校の概要

つづいて実践事例校として取り上げるのは、「ドイツ学校ポータル」の「重点テーマ」で「責任と参加」に分類され、「キーワード」では「民主主義的な行動」でヒットした、2018年の「ドイツ学校賞」受賞校マティアス・クラウディウス学校である。同校はインクルーシブ学校(Inklusive Schule)をコンセプトとする宗派別私立学校であり、同校のホームページ(<https://gesamtschule.mcs-bochum.de/>)の冒頭には、「本物の—他校とは異なる—インクルーシブの取り組み」(echt - anders - inklusiv)という標語が掲げられている。学校の概要は以下のようなものである。

- ・学校形態：総合制学校(5-13学年)
- ・生徒数：900名
- ・教員数：70名
- ・特別支援教育教員数(Sonderpädagogen/innen)：30名以上

以下、同校の実践に関する情報は、「ドイツ学校ポータル」に掲載された2018年7月23日付の記事「生徒代表が考えについて対話を求める」(Schülervvertretung bittet zum Einstellungsgespräch) (Köhler 2018) および Bertelsmann Stiftung 2020による。

#### ②生徒参加の特質Ⅰ：生徒による共同決定

同校の生徒参加の特質は生徒による共同決定にある。「学校の教育に関してどのようなコンセプトが導入されるのか、新たな教員の採用はいつ行われるかといったことについて生徒は意見を述べることができるか、ポッフムにあるプロテスタントのマティアス・クラウディウス学校ではこうし



た種類の共同決定は自明のことである」(Köhler 2018)、『もちろん、本校で働きたいと思う教員は従来どおりの申請手続きを経る』と教務主任のシュテファン・オストホフは言う。候補者の面接には生徒代表組織の構成員も同席し、質問も許されている。最近の例で言えば、生徒の構成員はインクルージョンについてどう考えるのか、本校のキリスト教の考え方についてどう考えるかについて候補者に質問していた。最終決定権は当然のことながら学校にあるとオストホフは述べている」(Köhler 2018)とされるように、最終決定権までは持たないものの、生徒代表は教員の人事にも関与できる。

他の事例として、「しかし、生徒が考えを押し通すことがしばしばある。2015年に数多くの難民がドイツに押し寄せた際に、学校は難民の子どもたちを受け入れるべきであるということに決定的な貢献したのは生徒たちであった。厳密に言えば、学校には生徒を受け入れる余地はなかった、とオストホフは述べている。それにもかかわらず生徒代表は、各学級で1名ないしは2名の生徒を受け入れると述べた。『生徒たちは、難民のための特別クラスは受け入れたくないと考えていた。生徒たちは新しい仲間を始めから通常の学校生活に統合し、家族の亡命申請が承認された場合に、各学級にそのまま止まることができるようにしたいと考えていた』、すなわち、この方法は証明された、とオストホフは述べている」(Köhler 2018)とされるように、生徒たちの提案によって学校は方針を変え、難民の子どもたちを受け入れることとなった。

### ③生徒参加の特質Ⅱ：授業方法に関する共同決定

他にも次のような活動において共同決定が見られる。「たとえば今年度、第11学年生に学習期間(Studienzeit)を導入するという別のケースでは、生徒代表はこれを拒否した。第11学年のクラスにいる生徒代表の1人であるシュテファンは『準備時間が短すぎ、提案はさらに練り上げられるべきであると我々は考える』と拒否の理由を挙げた。その後、教員は生徒代表と協力し提案を修正した。次年度の始めには導入されるはずである。そうすれば、11学年の生徒たちは毎日2時間、特定の課題に自主的に取り組む時間を持つことになる」(Köhler 2018)とされるように、授業方法に関するテーマも共同決定の対象となっている。

学校生活に関する事柄についても同様に共同決定が行われる。「生徒代表は毎週会合を開き、何をしなければならぬか相談している。『我々は、独自の校則を持っており、多くのことを共同決定できる』とシュテファンはいう。現在、学校での新たな携帯電話に関する校則の制定が重要課題である。第10学年のマリアは、以前の校則は時代遅れになっており、『多くの生徒が守っていない』と述べている。これまで学校で携帯電話を使うことは禁止されていた。持ってきても構わないが、使うことは認められていなかった。生徒代表は校則を変えたいと思っていた。『我々は休み時間に携帯電話を使うことに賛成です』とマリアは言う。しかし、依然として授業中は携帯電話を使うことは禁止されている」(Köhler 2018)とされるように、校則も共同決定の対象となっている。

### ④生徒参加の特質Ⅲ：インクルージョンを支える共同決定

同校ではインクルージョンが学校の重要なコンセプトとなっている。「生徒が取り組んでいるもう一つのテーマはインクルージョンである。本校は1970年に創立されたときに、どのような支援が必要であるかに関係なく、すべての生徒を受け入れるという任務を課した。このことは順調に進んでおり、マティアス・クラウディウス学校が今年、ドイツ学校賞を受賞した理由の1つである。この考えはさらに発展されるべきである。マティアス・クラウディウス学校の生徒代表もこれについて取り組んでいる」(Köhler 2018)とされるように、同校においてインクルージョンは開校以来のコンセプトである。

こうした理念を具体化した新しいプロジェクト「出て行こうーあなたの力を体験しよう」(“Herausspaziert – erlebe Deine Fähigkeiten”)が始まっている。「マティアス・クラウディウス学校では、2017/2018年度から8学年の生徒全員が自ら選択した課題に挑戦する機会が設けられている。夏休みの後、集中的に準備する期間を経て、生徒たちには自らの冒険に立ち向かう3週間が待っている」(Bertelsmann Stiftung 2020)とされるように、同校では長期間にわたる活動の機会が用意されている。具体的には、「生徒たちがグループでハイキングやサイクリングツアーに出かけ、エコロジー、教会の仕事、社会福祉に関するプロジェクトに取り組んだり、農場で働いたり、小説を書いたりする」(Bertelsmann Stiftung 2020)とされるように、日常の学校生活では体験できない活動に挑戦する。その際、「生徒たちは自分自身で目標を設定し、勇気を出して取り組み、危険を冒しながら、失敗しても再び立ち上がることを学ぶ。もちろん、すべての活動がインクルーシブで行われる。ハンディキャップの有無にかかわらず、計画や実施の際に生徒集団には、このプロセスを教育的にサポートし、危ない状況では適切に手助けする大人が同行する。しかし、大人の主な任務は可能な限り手助けしないことである」(Bertelsmann Stiftung 2020)とされるように、大人の手助けを借りながらも、最大限自分たちの力だけで取り組む体験をする。

その中でも、「支援が必要な25名の生徒も参加できる。たとえばミアは自転車ツアーに参加した。ミアが属するグループでは、活動の準備をする中でミアとタンデムに乗ることに決まった」(Köhler 2018)とされるように、インクルージョンの活動は欠かせない。こうした中で、「マティアス・クラウディウス学校の生徒にとって共同決定の考え方が学習者と教員との間の特別な関係をもたらしたことは明らかである。これは教務主任のシュテファン・オストホフの意見でもあり、彼は『対等の関係です』と述べている。生徒と教員との関係は知っているどの学校よりも緊密であると、マリアとシュテファンは述べている」(Köhler 2018)とされるように、共同決定はインクルージョンを支える基盤となっている。

#### 4. 生徒参加タイプの試案作成

民主主義教育の実践事例校において生徒参加の取り組みが異なる3校を分析した。つづいて、実践事例校での生徒参加の取り組みとアイケルの論稿(Eikel 2016)を手がかりに、生徒参加タイプの試案を作成する。本稿の冒頭でも述べたように、生徒参加の取り組みは100校において100通り存在する。類似の取り組みは見られるとしても、生徒参加の取り組みは学校ごとにきわめて多様である。そのため、生徒参加の類型化を行う上では、何度か試案を作成しながら分析対象となる実践事例校を少しずつ増やしていく過程で生徒参加タイプの確認だけでなく、作成された生徒参加タイプの試案の微修正も必要となる。本稿における生徒参加タイプの試案作成はその第一歩である。

民主主義教育における生徒参加の類型化を行うに際し、類型化のための枠組みづくりとして、まず民主主義教育においてどのような生徒参加の行動形態が想定されているかについて吟味することが必要である。この点についてアイケルは、次のような3つの行動形態を挙げている。すなわち、「政治的な共同決定および共同選択」(politische Mitbestimmung und Mitentscheidung)、「民主主義的な対話および協議」(demokratische Mitsprache und Aushandlung)、「能動的な共同形成および関与」(active Mitgestaltung und Engagement)である(Eikel 2016:169)。これを図示すると、図1のようになる。

具体的には次のような行動形態である。まず、「政治的な共同決定および共同選択」についてアイケルは、「狭い意味では、選挙形態での共同決定、採決 (Abstimmung)、質問紙による意見聴取 (Meinungsabfragen) 等を意味する」とし、「広い意味では、参加の基本原則に関するものであり、代表制による決定への関与 (Teilhabe) だけではない」とした上で、「政治的な共同決定は市民権にもとづいており、各人の基本的な政治的知識、判断力、意思決定力を必要とする」としている(Eikel

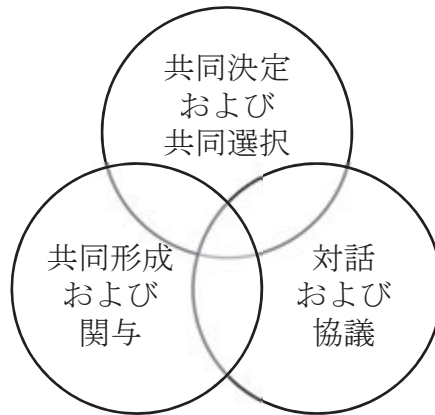


図1 民主主義的な参加の行動形態 (Eikel 2016:170)

2016:169)。

次に、「民主主義的な対話および協議」については、「コミュニケーションや協議による民主主義的な意見形成への関与としての参加という理解にもとづいている」とし、「たとえば、デモや抗議も政治的な意見表明や意見形成の重要な形態ではあるが、ここでは双方向での直接的なコミュニケーション形態に焦点が当てられる」としている (Eikel 2016:169)。

つづいて、「能動的な共同形成および関与」については、「自らのイニシアチブや自己組織化にもとづく積極的な行動や関与」とし、「日常生活 (Lebenswelt) の積極的な形成への関与」とした上で、「ここで大切なことは、自分や友人の考え、価値、目的にもとづいて、成果を目指しながら、また大抵はテーマに合わせて、自らの生活世界の形成に積極的に関与することである」としている (Eikel 2016:169)。

これら3つの行動形態は互いに関連性を持ちながら民主主義的な生徒参加を特徴づける行動形態として理解されていることが伺える。

つづいて図2は、アイケルによる「参加を促進する構造および学習の段取り」(Partizipationsfördernde Strukturen und Lernarrangements) の一覧図である (Eikel 2016 : 177)。横軸には、図1に示した「民主主義的な参加の行動形態」が設定されている。ただし、ここでは、「能動的な関与および責任遂行」(Aktives Engagement und Verantwortungsübernahme)、「民主的な対話および協議」(Demokratische Mitsprache und Aushandlung)、「政治的な共同決定および選択」(Politische Mitbestimmung und Entscheidung) とされ、用語の一部が異なっているものの、基本的には対応している。他方、縦軸には、「学級／学習集団」(Schulklasse/Lerngruppe)、「授業／学習」(Unterricht/Lernen)、「学校生活」(Schulleben)、「学校経営」(Schulmanagement)、「周辺地域」(Schulumfeld) という生徒参加の5つの場面が設定されている。民主主義教育における生徒参加は、こうした行動形態および場面によってその位置づけを整理することができる。実践事例校として取り上げた3学校における生徒参加の取り組みも、この枠組みの中に位置づけることができる。

これらを手がかりに実践事例校における生徒参加タイプの試案を以下のように考える。最初に実践事例校として挙げたノイルビーン学校における「生徒が学校を担う」日の取り組みは、アイケルの横軸でみれば、生徒たちの能動的な活動と責任遂行を核とした体験活動の実践であることから、「能動的な関与および責任遂行」に当てはまる。縦軸に関しては、学校全体を任されるという実践であり、「学級／学習集団」から「周辺地域」にまで及ぶ取り組みである。同校の生徒参加は「タイプ I : 体験活動型」と呼ぶことができる。

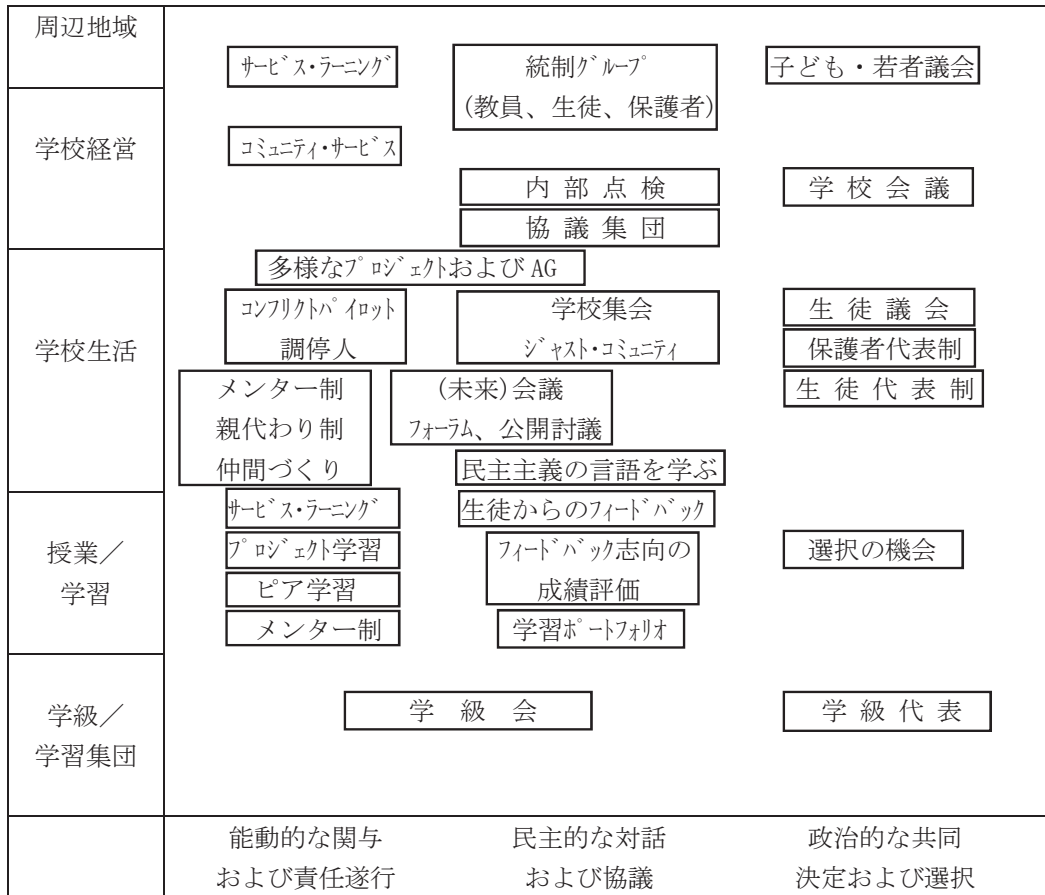


図2 学校において参加を促進する構造および学習の段取り (Eikel 2016:177)

次に実践事例校として挙げたマルティン学校における学習計画の取り組みは、アイケルの横軸でみれば、教員との綿密な対話や協議の積み重ねの上に成り立つ自己決定の取り組みであり、その際、教員は生徒の多様性を重視するとともに生徒のニーズに応えることを重視していることから、「民主的な対話および協議」に当てはまると考える。縦軸に関しては、授業づくり、すなわち、「授業／学習」に重点が置かれている。同校の生徒参加は「タイプⅡ：授業づくり型」と呼ぶことができる。

つづいて実践事例校として挙げたマティアス・クラウディウス学校における生徒による共同決定の取り組みは、アイケルの横軸でみれば、様々な事項に対する共同決定の取り組みを核としていることから、「政治的な共同決定および選択」に当てはまると考える。縦軸に関しては、ノイルピーン学校とほぼ同様に、「学級／学習集団」から「学校経営」に至るまで広範な共同決定の場が与えられている問題解決の実践である。同校の生徒参加は「タイプⅢ：問題解決型」と呼ぶことができる。

これらをまとめると、表1のようになる。

## 5. 今後の研究課題

本稿で取り組んだ生徒参加タイプの試案作成は、生徒参加の類型化の第一歩である。今後、以下のような課題が残されていると考える。

表1 生徒参加タイプの試案

	タイプⅠ：体験活動型	タイプⅡ：授業づくり型	タイプⅢ：問題解決型
事例校	ノイルピーン学校	マルティン学校	マティアス・クラウディウス学校
行動形態	責任遂行	自己決定	共同決定
活動の場	学校全般	授業／学習	学校全般

第一に、事例分析の蓄積による生徒参加タイプの精緻化である。本稿では3校の実践事例校を取り上げた。しかし、他にも数多くの実践事例校が存在する。実践が評価され何らかの表彰を得ている実践事例校も多数存在するし、まだ特段の評価を得ていない学校も多数存在する。当面は各種の表彰を受けている実践事例校を中心に、評価された優れた実践を分析するとともに、事例分析を蓄積することで生徒参加タイプの試案を精緻化していくことが必要である。

第二に、各校における取り組みの発展段階に関する「学校開発」(Schulentwicklung)の観点からの解明である。どの学校においても、時間の経過とともに実践の内容は少しずつ変化していく。実践の積み重ねにより、実践が拡大したり高度化したりしていくのが通例である。その意味では、ある特定の学校の実践を取り上げても、そこには時間の経過ともなう発展段階を見出すことができる。第一に挙げた課題のような共時的な生徒参加タイプの分析による類型化とともに、経時的な生徒参加タイプの類型化も必要となる。この点については、民主主義教育における生徒参加を「学校開発」の観点から解明することが必要となる。

第三に、複数の取り組みにおける関連性の解明である。生徒参加を実践している学校においては、内容の異なる複数の取り組みを実践しているケースが数多く見られる。どのような取り組みとどのような取り組みの親和性が高いのか、ある取り組みを実践したことで特定の取り組みに発展しやすいのかなど、ある取り組みと別の取り組みがどのような関連性のもとにあるのかといった点を解明することも重要な課題である。

第四に、学校段階による生徒参加タイプの特質の解明である。本稿では、部分的に初等教育の生徒たちに関する生徒参加も含まれていたが、おもに活動の幅が広い中等教育における生徒参加を中心に分析してきた。今後は中等教育における生徒参加とともに初等教育における生徒参加の取り組みについても分析し、中等教育における生徒参加タイプとの比較を行うことも重要な課題となる。民主主義教育における生徒参加は初等教育から、あるいは近年では就学前教育の段階から取り組みが進められており、学校段階ごとの生徒参加の発展段階や内容の広がりについて解明することが課題となる。

第五に、生徒参加タイプを支える教員集団の支援方法や教員集団の特性の解明である。本稿で取り上げた実践事例校に関する記述の中にもみられたように、生徒参加は教員集団による支援なくして十分な成果は得られない。生徒参加を支えるために、学校経営担当者のリーダーシップや役割を含め、教員集団がどのような支援をしているのか、またそうした支援と行う教員集団にはどのような特性がみられるのかといった点の解明も重要な課題である。

#### <引用文献>

- Bertelsmann Stiftung (2020) : “Projekt Herauspaziert” (Matthias-Claudius Gesamtschule Bochum). In: <https://www.bertelsmann-stiftung.de/de/unsere-projekte/abgeschlossene-projekte/jakob-muth-preis/2019/projekt-herauspaziert-matthias-claudius-gesamtschule-bochum> (Stand: 21.11.2020)
- Beutel, Silvia-Iris/Höhmann, Katrin/Pant, Hans Amand/Schratz, Michael (Hrsg.) (2016) : Handbuch Gute Schule – Sechs

- Qualitätsbereiche für zukunftsweisende Praxis. In: <https://www.deutscher-schulpreis.de/handbuch-gute-schule-sechs-qualitaetsbereiche-fuer-zukunftsweisende-praxis> (Stand: 21.11.2020)
- Das Deutsche Schulportal (2019) : Verantwortung teilen – Schulkultur fördern. In: <https://deutsches-schulportal.de/konzepte/schueler-machen-schule-verantwortung-teilen-schulkultur-foerdern-eigene-staerken-erkennen/> (Stand: 26.10.2020)
- Das Deutsche Schulportal (2020a) : Selbstbestimmte Lernprozesse im Alltag begleiten. In: <https://deutsches-schulportal.de/konzepte/selbstbestimmte-lernprozesse-im-alltag-begleiten/> (Stand: 26.10.2020)
- Das Deutsche Schulportal (2020b) : Die Qualitätsbereiche. In: [https://www.deutscher-schulpreis.de/sites/default/files/documents/2020-08/Plakat\\_Qualitaetsbereiche\\_DSP\\_2020.pdf](https://www.deutscher-schulpreis.de/sites/default/files/documents/2020-08/Plakat_Qualitaetsbereiche_DSP_2020.pdf) (Stand: 5.11.2020)
- DeGeDe (2016) : Hommage an die Demokratiepädagogik – 10 Jahre DeGeDe. In: <https://www.degede.de/wp-content/uploads/2019/06/degede-festschrift-2016-10jahre.pdf> (Stand: 25.10.2020)
- de Haan, Gerhard/Edelstein, Wolfgang/Eikel, Angelika (Hrsg.) (2007) : Qualitätsrahmen Demokratiepädagogik, Heft 2 Demokratische Handlungskompetenz Begründungen, Konzeption und Lernarrangements.
- Eikel, Angelika (2016) : Demokratistische Partizipation in der Schule. In: DeGeDe (2016), S.164–180. (Stand: 25.10.2020)
- KMK (2018) : Demokratie als Ziel, Gegenstand und Praxis historisch-politischer Bildung und Erziehung in der Schule. In: [https://www.kmk.org/fileadmin/Dateien/veroeffentlichungen\\_beschluesse/2009/2009\\_03\\_06-Staerkung\\_Demokratieerziehung.pdf](https://www.kmk.org/fileadmin/Dateien/veroeffentlichungen_beschluesse/2009/2009_03_06-Staerkung_Demokratieerziehung.pdf) (Stand: 30.11.2020)
- Köhler, Regina (2018) : Schülervertretung bittet zum Einstellungsgespräch. In: <https://deutsches-schulportal.de/schulkultur/demokratie-in-der-schule-schuelervertretung-bittet-zum-einstellungsgespraech/> (Stand: 25.10.2020)
- Rösch, Roman/Wolf, Dagmar (2016) : Zehn Jahre Deutscher Schulpreis – Erfolge, Herausforderungen, neue Aufgaben, S.182–188. In: Beutel/Höhmman/Pant/Schratz (Hrsg.) (2016). (Stand: 21.11.2020)

(追記)

本研究は、科研費・基盤研究(C)「ドイツ初等中等学校の民主主義教育における生徒参加の類型化および体系化に関する研究」(課題番号:18K02672)および科研費・基盤研究(C)「生徒参加による主権者教育に関する日米仏独の比較研究」(課題番号:18K02544)による研究成果の一部である。